

終幕ではなく、序幕である

劉志琴

李慎之先生の病が重くなってから、その病状は多くの知識人の心を動かし、国内外の知人やそうではない人からの問い合わせは引きも切らず、多くの人が先生の病室の外でずっと待ち続け、わざわざ遠くから見舞いや看護に來た人もいた。

先生は権力も権勢もない、とつくに舞台を下りた老人であるのに、どんな力がこのように多くの人々の関心を集めたのであろうか。先生には長編の大作はないが、一代の思想家として長くその名を歴史書に留めるだろう。大学者とは見なされないが、透徹した見解と人並みはずれた胆力と見識は学术界において最上の榮譽を勝ち得ている。これまで先生が学生をひき連れている姿を見ることはなかったが、多くの有名無名の若者がその名を慕って後につき従い、一夜の教えを聞くことを大きな喜びとしていた。高位高官の門前にはいつも多くの客が満ちているが、一旦権力の中枢

を離れるとたちまち訪れる人も少なくひっそりとするものだ。しかし李慎之先生はまさしく権力を失った後にこのような厚い信望を集めたのであり、中国社会科学院副院長であつた時でさえこのような声望は必ずしもなかった。

私個人印象の中でも先生はこのようであつた。社会科学学院の一員として私は部下であつたが、先生がその任にあつた時は遠くからちらりと見るのみで、その言葉を氣にかけたこともなかった。一九九九年先生の『國慶節の夜の独り語』が世に出ると、私にとっては醍醐を頭に注がれて知恵を授かつたようで、強烈なショックを受けた。これが他でもなくその名を天下にとどろかせた『風雨蒼黃五十年』である。激情あふれた告白とは言わなくても天下に先んずるその勇氣には、幾千万人の読者が感動した。その文章が伝わってまもなく、私はある小さな店でその文章をコピーしていた。一人の中年の人が、私のコピーに中国社会科学院

の文字があるのを見ると、すぐに私をじっと見て「あなたは社会科学学院の人ですか、大したものですね、あなた方の所に李慎之がいるとは」と言った。「そうですか」。私は無意識に尋ねた。「何をなさっていますか」。「私は商社で働いています」。「風雨蒼黄五十年」を私たちは皆読みました。本当に良かった、読んだあと眠れませんでしたよ。学術専門外の普通の職業人にそのような大きな反響を巻き起こしているとは、私は思いもかけなかった。それでは私の同業者の中ではどうだろうか。私は南開大学のある歴史学の教授が私に語った言葉を永遠に忘れることができない。

「李慎之先生は私の心の中の聖人です」。

「聖人」?! これは久しぶりの言葉だ。この評価の重みは大きく、あまりに重くてしばらく考え込まないではいられなかった。

『風雨蒼黄五十年』に最も感動したのは、先生のあの敢えて直言する勇氣と精神である。本当のことを話すことができるかどうかは中国ではたいへん難しい問題であり、そうでなければ歴史上どうして筆を執ってありのまます書いた歴史官が度々迫害を受け、生命という代価さえ支払ったのか分からないだろう。建国後一つまた一つと政治運動が起こるたび、一陣また一陣の人々が右派や右傾日和見主義分子として打倒されたが、よく見れば大多数は本当のことを言ったがためである。本当のことを言った人は地獄に堕ち、

嘘を言った者は青雲をまっすぐ上るようにとんとん拍子で出世した。嘘はさらに理論を形成し、人々は多分忘れるはずもない、一九五〇、六〇年代以来、文化界は鳴り物入りでいわゆる「写真実」（真実を書く）を批判した。真実を書き、本当のことを話すのはブルジョア階級の思潮と見なされた。真実でなく嘘を話せばあたかも「プロレタリア階級」の思想「になれるか」のようであった。しかしこのような言や嘘が一度中国中に舞い散ると、その弊害はいろいろな業種に広まり、大躍進後の大飢饉にいたっては、明らかに人災だったのに、天災だと言い逃れた。文化大革命後期において経済が崩壊に瀕しても、聞こえてくるものは依然として驚のさえずり燕の舞い、すばらしい情勢だった。この教訓は中華民族の心に深く刻まれるのに十分だ。

混乱が治まり正常に復した後、学术界が過去を回顧して



劉志琴 [Liu Zhiqin]

最も価値があることは、歴史の経験と教訓とを改めて総括し、史学界においてさらに真実の希求を呼び戻そうとする良知である。過去において、歴史を研究し経験と教訓とを総括することは、政治や政策サービスのため、実際には個人の意志へのサービスのためであり、勝手に真実を骨抜きにし、すりかえ、思うままに書き、歴史にその歴史をたどらせず、誤った方向に導くことさえした。一九五〇、六〇年代最も人気のある課題だった太平天国の研究について言うならば、累計で三千余りの論文が発表され、史学専門の論文のトップにあつた。しかしかくも多くの論文は、太平天国がなぜ、家庭を崩壊させ、大釜の飯を食い、男女老少を男女の二大陣営に分けるようなことをしたかに対する教訓を真剣に汲み取り研究しなかった。それは何故か。大躍進中竈を壊して共同食堂で食べるような熱狂が再度出現したのを何故座視したのか。極左思潮の影響を受けた赤色カンボジアは家庭を壊す暴政を強行実施したのだ。これは史学の問題ではなく、さらに史学従事者の責任でもないが、とつとくに歴史に唾棄されたこれに類する誤りを一つまた一つと積み重ねたことは、史学研究の専門家として知らないはずがない。しかし、この失敗の教訓を率直に告げ、真の知識をもって意見を述べ、損失を最大限減らした者は誰がいるだろうか。一人の史学研究者として、恥ずかしく思わないわけにはいかない。

ここまで考えて、私はあの古参教授が李先生に与えた「聖人」という評価を理解した。なぜならばこれは上から下まで求めても得がたい史学の魂なのであり、李先生の万言書の中に十分に具体的表れを見ることができ、これでどうして心の奥底から賛嘆せずにおれようか。

人々は皆、李先生のことを現代中国の自由主義のリーダーであるという。その実、李先生は筋金入りの傑出した民族魂の持ち主である。五〇年間の紆余曲折を経て、忠誠を尽くして中国共産党の三代にわたる指導者に向かって批判し建議してきた。彭德懷や顧准の末路を知らないわけではなかったのに、肉をえぐって母に捧げるような真心で、さらには卵を石にぶつけるように敗北を承知で立ち向つた。このときの石は彼を砕けなかった。また悪いレッテルを貼つたり言いがかりをつけたりもしなかった。さらに、身体的自由を制限することもなかったが、先生を無情にも封殺し、文章や言論を発表する場所をとり上げ、とりわけ皇帝のお膝元である職場の社会科学学院では、なおさら文章を発表する余地はなかった。しかしながらこの情報化時代に、小さな火種を封殺しようとしても、風の助けさえあれば火は勢いを増し、ますます盛んに燃え上がる。李先生の文章は一世を風靡し、風は国内外を動かし、この封殺と正比例して加速的に発展し、この対策が賢かったのかそれとも愚かだったのかは、全く分からない。

李先生はまさに公明正大、清廉潔白な人で、その人格は同僚の中でも卓越していた。よく目にすることだが、社会科学院で院内の指導者の地位にある者は、過去に學術研究に携わったか否かにかかわらず、一旦権力を持つと、往々にして多くの資金を握り、同僚を組織して本を書き自説を立て、自分は主編という椅子にのうのうと腰掛け、博士学生の指導教授になることさえある。しかし李先生は四、五〇年前にはもう新華社の著名な英才であり、長い間國家指導者のために報告を起草し、「大参考」（高級幹部向け情報誌―訳注）を主編翻訳し、アメリカ研究所所長と社会科学院副院長に就任した後は、研究員の肩書きさえなかった。

副部長クラスの職務はあったが、秘書を置かずそのまま任を終えた。文章をコピーしたり、ファクスを送ったりしたときは友人に助けを頼まなければならなかった。先生自身は高級幹部であったが、四人の子どもたちは一人として政治や商売に従事せず、皆普通の職員である。私は先生が家を分配で与えられたと知った後に、老人は適應能力が劣っているのて熟知した環境を変えることは良くない、一番いいのは引越さないことだと、言ったことがあった。先生はため息をついて「私の息子は労働者だ」と言った。このとき私はすっかり分かった。先生は給料で多くの子どもたちを育ててきて、生活は決して豊かではなかった。右派にされ、起ちあがってもまた左遷され、先生の妻や子どもた

ちに多大な痛手を負わせた。父親としてどうして後ろめたくないことがあるうか。過ぎ去った歳月はしかたないが、子どもたちにほかに何を残してやれるであろうか。もし少し大きな家子どもたちに残せたならば、彼らの傷ついた心を癒すことができるのではないだろうか。このことこそが先生が引越した本当の原因であると私は思う。

李先生は旧式の清廉な官吏や君主を諫める家臣ではなかった。先生は深い西洋文化の教養と広範な国学知識を持っていた。先生の書く文章や理論中の大所高所からの戦略的眼差しや透徹した鋭い分析の論理能力は、どれだけの専門家や学者を信服させたか知れない。先生は伝統教育とマルクス主義の洗礼を受け、二つの時代を跨ぎ、過去にも属し、未来にも属した。先生はもともと普通の人で、八〇歳になっても童心を持ち、毎年元旦前後には受け取った年賀はがきをひもでつなぎ、縦横に交差させて客間にぶら下げ、色とりどりに美しく、ゆらゆらと、まるで万国旗がはためくようでもあり、またカーテンのようでもあった。先生が杖をついてその下をぶらぶらと歩きながら、一人の公民教員となる理想を興奮して語るのを見て、なんと尊敬すべき愛すべき老人で、澄みきっているが粘り強い人だろうと、私はふと思った。

今、先生は壮志を實現しないまま幕を閉じた。先生の幕切れはSARSが中国を横行している時で、事

件の多い春だった。思いも寄らないことに、思いがけない災難はかえって習慣化した嘘や逃げ口上を処罰し、汚職高官を一掃した。これは共産党が政権を握って以来なかった措置で、これより前には往々にして路線闘争があったときだけ免職がなされ、高官となった失脚者が時にはまた違うところで拔擢されるという情況も出現した。この果敢な決定は民衆の全面的な支持を勝ち取り、共産党に対する信頼を増した。人々はこれを契機として政治の民主化の進展が加速するように、首を長くして待ち望んでいる。

これまでいかなる進言でも達成できなかったものが、意外にも天災によつて促進され、このために高い代価を支払うことになった。これは余儀なくされた選択であった。しかし李先生が倦まず弛まず求めたのは、主動性を發揮して、最小の代価で、一步一步体制内部から、憲政を実現するという理想ではなかっただろうか。

幕を閉じるこの時が、どうして序幕の開幕でないことがあろうか。

(邦訳 六鹿桂子)

●追悼 李慎之

李慎之先生を訪ね帰り、その急逝を知る

張 琢

「文官は直諫に死し、軍人は戦争に死す」。中国の専制の歴史の中で、とりわけ暗君らの暴虐政治の時期においては、無数の無念の死を遂げた忠誠心あふれる烈士が出て、人々に敬慕された。その中の何人かは「果てしなく大きい皇帝の御恩」を受けたり、あるいは偶然に思いがけない幸運に

あつたりして、屈しても死なず、尚まだ憤りを述べる気概があれば、人の心を揺さぶる絶唱を残した——「屈原放たれ、乃ち離騷を賦す」（屈原は戦国時代楚国の王族。讒言によつて追放された——訳注）。

中国共産党の歴史からみると、残酷な党内闘争の中で、